

国指定重要文化財

阿蘇大宮司 居館跡 浜の館出土品展

熊本県教育委員会
矢部町教育委員会

「浜の館出土品」里帰り特別公開展にあたって

「不可能が可能になった」とは、このことでありましょう。多くの町民が久しく待ち望んだ、この公開展でありました。

国の重要文化財なるが故に、移動展示など思いもよらないことでありましたが、町民の熱望に応えようと、県文化課では文化庁との諸々の折衝を進められ、特別なご高配により、今私達の目の前に、中世文化を彩る陶磁器二十一点を展示できる運びとなりました。

昭和四十八年から県文化課の手により浜の館（現矢部高校敷地）の発掘調査が行われました。発掘された出土品の数々は、日本の歴史を物語る確かな証として国の重要文化財に指定され、以後熊本県教育委員会に保管され今日に至っております。

今回の里帰り展を機会に、町民こそってご覧いただき、郷土の歴史を自らの目で確かなものにされるときに歴史的文化的の粹に目を輝やかしながら、文化財保護の重要性に思いを及ぼし、このような歴史的背景をもつ矢部町に住むことの喜びと誇り、そして明日からのくらしの活力へとつながりていただければと念じて止みません。

公開展開催にあたり、県文化課はもとより関係諸機関へ改めて深く感謝の意を捧げるものであります。

平成五年七月二十四日

矢部町長 甲斐利幸

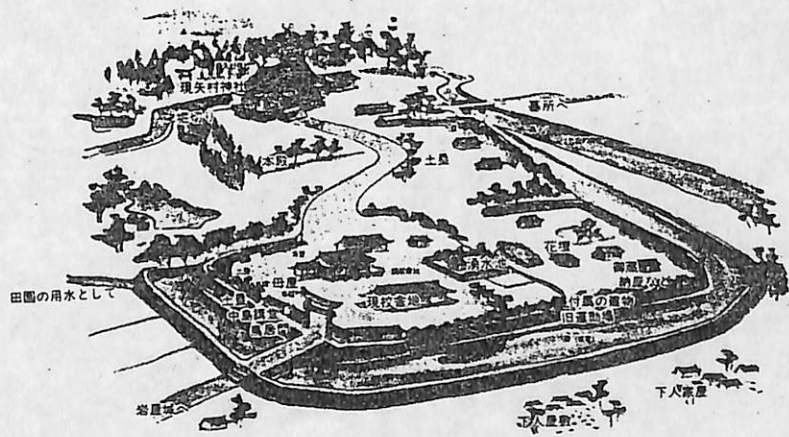
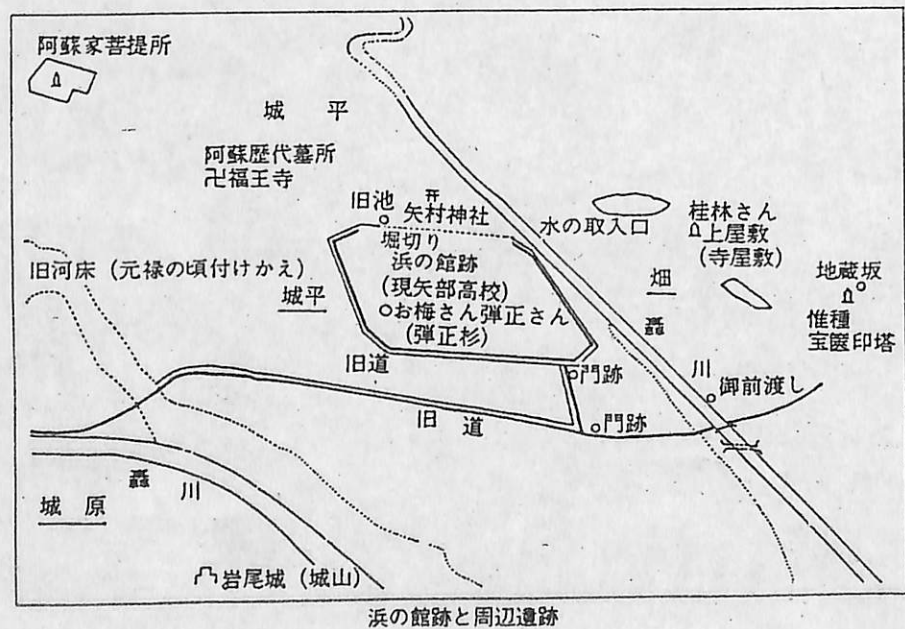
浜の館の伝承と発見

浜の館についての最も古い記録は、甲佐早川の社司であった渡辺玄察が、先祖以来の言伝えを纏めた「拾集昔語」で、元禄五年（一六九二）に書かれた。このなかで阿蘇大宮司惟種のことによれば、岩尾城の傍に御陣之内・浜の御殿・浜の御屋形とよばれる館があったこと、さらに島津の侵攻時、老臣の甲斐氏、仁田水氏が薩摩に帰したので、大宮司兄弟が館にあっては危ないとの勧めで、目丸の山中に隠れたことを記している。「肥後国誌」には「陳の内、濱御所跡、濱ノ御殿トモ云」とつたえ、渡辺質の書いた「矢部風土記」にも同様の記事があり、館の伝承を記録している。また、地元の古老たちの間にも、阿蘇大宮司さんの館があった、と言い伝えられていた。

この伝承を重視した熊本県文化課では、矢部高校改築の機に発掘調査を実施したところ、伝承どおりに、焼失した館が土中から姿を現し、「拾集昔語」に記す「浜の館」の最終日に「御代々の御文繪旨、御宝物は男成明神の御宝殿に隠納奉、（中略）此外の御宝物は浜の御所江、人しらざる穴蔵有之候に隠置」とみえる。祭祀用具とみられる陶磁器類が、池の辺の穴のなかから発見され、伝承の確かさを証明した。

浜の館の発掘

二回の調査を実施して「浜の館」の建物跡と庭園跡を調査した。調査では、桁行七間・梁間四間の礎石を持つ第一棟、桁行四間・梁間二間の第二棟、同規模の第三棟及び、建物規模がはっきりしないが時期の先行する二棟の建物跡が出土した。この内、第一棟は総建坪数二八坪を数える。このうち中央部の一二坪が部屋に充てられ、周囲は幅一間のコの字形の縁を持ち、家屋の西の妻方向に四四方の砂利を敷き詰め、たたきを付設していた。また漆喰壁を持ち、屋根は葺葺きの入母屋造りと推定された。この特異な構造の建物は、出土品に日常雑器等が少ない等の点からみて、「対面所」のような性格を持つ建物ではないかと考えられている。泉水遺構は東西一一・七m、南北一六mの規模で、当時の地表から一六cmの深さを持ち、汀線部に小振りの石を配している。この泉水の北側に石の立った二個の穴があり、そのなかから阿蘇家の宝物が出土した。



（前略）一同に申談候は、御後室は小宰相と云大女臈と能き隠居の在所へ供奉仕、御心安可被成御座候、御代々の御文繪旨御寶物は、男成明神の御寶殿に奉隠納、一太夫守護可仕候、其内繪旨口宣文書は坂梨氏背負可申候、此外の御寶物は濱の御所江人しらざる穴蔵有之候に隠置。（後略）

渡辺玄察の記録（『拾集昔語』より）

江戸時代（元禄頃）

浜の館の秘宝

中国・明時代
熊本県教育委員会蔵

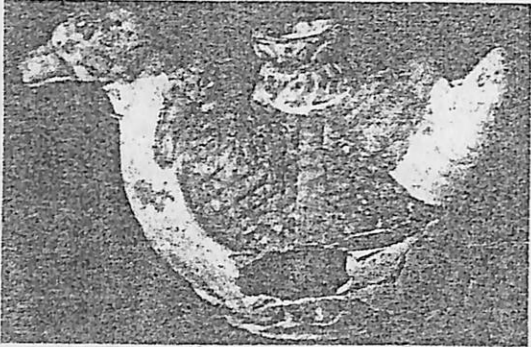
泉水の北側の二個所の穴の中から、二一点に及ぶ宝物類が出土した。第一土坑は円形をなす、一五五×一五〇cm、深さ五五cmの穴で、黄金延べ板一個・白磁唐獅子一個・白磁窰一個・瑠璃製環三個が納めてあり、穴の上を人頭大の石で覆いかぶせていた。第一土坑から一m離れた所にある第二土坑は、やや小規模なもので一一五×一〇三cmをはかり、深さは同じであった。上を石で覆うことも同様であるが、木箱に納めたような状態で穴の片隅から十五点の焼物が出土した。種類は三彩鳥型水注四個・三彩牡丹文瓶二個・緑釉瓶二個・緑釉陰刻牡丹文水注二個・緑釉水注二個・染付牡丹唐草文瓶二個・青磁盒子一個である。第一土坑の出土品はお祭に使った道具であると考えられる。第二土坑の中国明代の青磁一点のほかは「交趾三彩」と呼ばれる、中国南部で明代に焼かれた軟陶である。この種のもは、インドネシアやフィリピンで祭祀に使われていた。阿蘇家でどのようにして入手したか、どのように使用したかはおおきな謎である。なお、これらの品々は歴史的な重要性から国指定重要文化財となった。



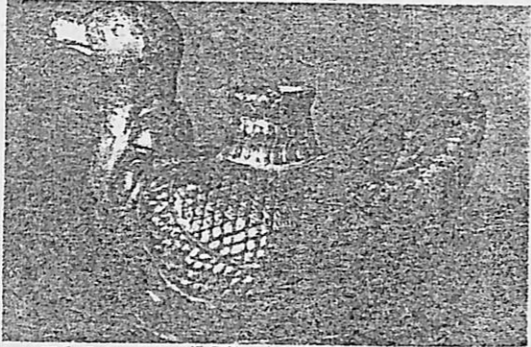
▲三彩鳥型水注 浜の館出土 高さ12.9cm・長さ18.9cm
・幅8.7cm 国指定



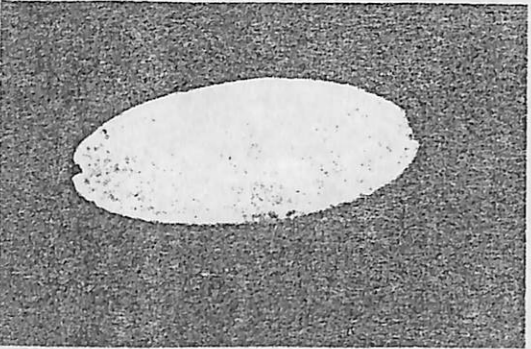
▲三彩鳥型水注 浜の館出土 高さ12.9cm・長さ19.5cm
・幅9.1cm 国指定



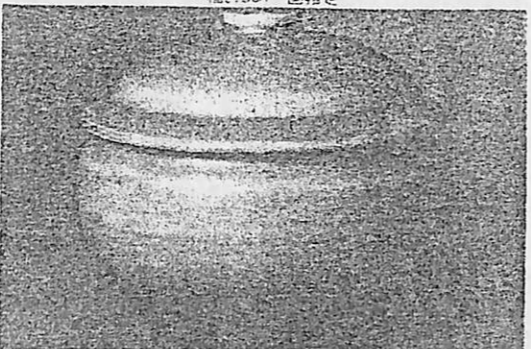
▲三彩鳥型水注 浜の館出土 高さ13.2cm・長さ20.0cm
・幅8.8cm 国指定



▲三彩鳥型水注 浜の館出土 高さ14.6cm・長さ17.3cm
・幅9.5cm 国指定



▲ガラス杯 浜の館出土 高さ1.9cm・口径8.3cm



▲青磁盒子(蓋物) 浜の館出土 全高10.6cm 国指定
蓋部 高さ4.0cm・口径9.1cm・最大径11.7cm
身部 高さ7.0cm・口径10.4cm・最大径11.6cm



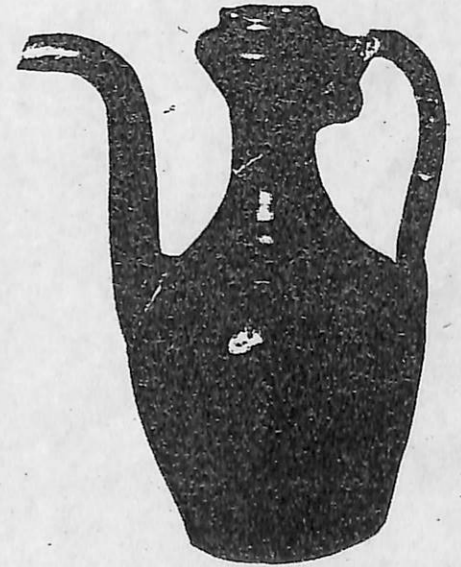
▲緑釉陰刻牡丹文水注 浜の館出土 高さ12.3cm・長さ15.3cm・幅10.3cm 国指定



▲緑釉陰刻牡丹文水注 浜の館出土 高さ13.4cm・長さ16.2cm・幅10.0cm 国指定



▲緑釉水注 浜の館出土 高さ17.7cm・長さ14.7cm
・幅11.0cm 国指定



▲緑釉水注 浜の館出土 高さ18.4cm・長さ15.2cm
・幅10.7cm 国指定

その他の出土品

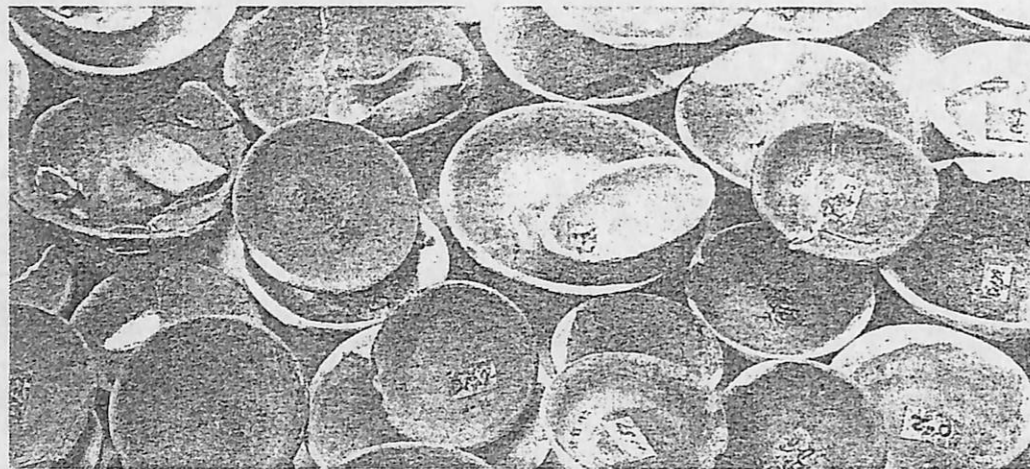
浜の館の調査では、阿蘇家が館を離れるとき埋納した宝物のほかに、館で使用していたさまざまな品物が出土した。大きく分けると、焼物類、金属類、石製品、貝、動物骨類、建築材がある。焼物では炭焼の皿の量が最も多く、千個以上ある。これらの中には、食器として使用されたものの外に、灯明皿として使用し油種の付着しているものや、耳皿と呼ばれるような箸置き等がある。次に量の多いものは、陶磁器類である。種類は多く、碗・皿などの中国明代製作の青磁・白磁や、瀬戸・美濃産の陶器類、水張とみられる備前焼きの大甕などがある。また火鉢は須恵質で灰色を呈すが、表面の口の下に菊花文や巴文、雷文など特徴的な紋様を印刻している。火鉢には三足が付いていた。同様の焼き質を持つ拙鉢も多く出土した。鉄製品は角釘のほかに建物の飾り金具とみられる銅製品、銅銭などがある。硯や石鍋も出土した。大量の中国青磁が使われている点などに浜の館の豪華な生活が窺える。



▲白磁小置物 浜の館出土 高さ2.0cm・長さ6.1cm・幅3.0cm 国指定



▲白磁小置物 浜の館出土 高さ9.6cm・長さ3.4cm・幅6.5cm 国指定



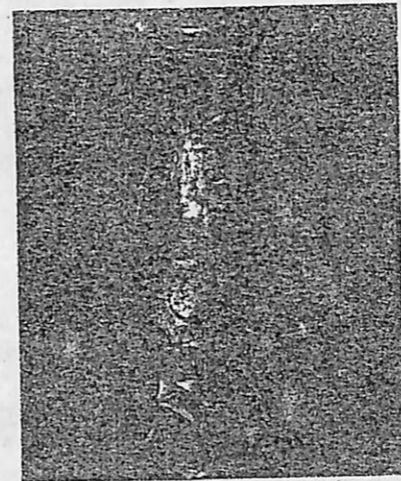
灯明皿ほか 熊本県教育委員会蔵



天目茶碗 熊本県教育委員会蔵



青磁片 熊本県教育委員会蔵



▲三彩牡丹文瓶 浜の館出土 高さ14.6cm・口径5.0cm・胴径8.8cm 国指定



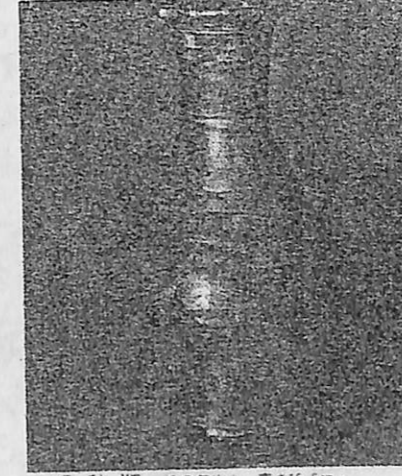
▲染付牡丹唐草文瓶 浜の館出土 高さ14.1cm・口径5.3cm・胴径10.9cm 国指定



▲染付牡丹唐草文瓶 浜の館出土 高さ14.4cm・口径5.6cm・胴径10.9cm 国指定



▲三彩牡丹文瓶 浜の館出土 高さ15.0cm・口径4.5cm・胴径9.0cm 国指定



▲緑釉瓶 浜の館出土 高さ15.6cm・口径5.0cm・胴径9.1cm 国指定

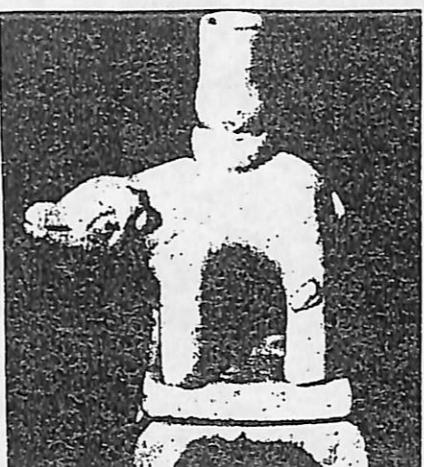


▲緑釉瓶 浜の館出土 高さ15.6cm・口径5.1cm・胴径9.0cm 国指定

浜の館

(阿蘇大宮司居館)

所在地 上益城郡矢部町
字城の平



地元、浜町の古老達の言の端に僅かに残る伝承がある。

——昔、浜の館という阿蘇大宮司さんのやかたが、今ん矢部高校のところにあったげな——。

この伝承を重視した県文化課が矢部高校改築工事を機に発掘調査を実施した結果、数百年ぶりに姿を現したのが、新聞・テレビ等を賑わした浜の館である。

この調査によって桁行七間、梁四間の家屋の土台石をはじめ数棟分の家屋の土台石や庭園等が火災に遭い倒壊したままの状態を現したのである。

また、焼土のなかから燈明皿、青・白磁、天目茶碗、水甕等の陶器類をはじめ、金張りの筭や大刀の鞘の一部、飾り金具、中国の銭貨などが出土した。調査の最後の日には、庭園の池の畔に掘られた二つの穴から、浜の館最後の日に阿蘇氏が隠し置いたと思われる二十一点にもものぼる宝物類が見された。

第一の穴から、黄金延板一個、玻璃製坏三個、白磁の置物(玉取り獅子・狛)、また第二穴からは、三彩鳥型水注(二対)、緑釉陰刻牡丹文水注(一対)、緑釉水注(二対)、三彩牡丹文瓶(一対)、染付牡丹唐草文瓶(一対)、青磁盒子(一個)等が出土した。

出土した焼物は、交趾三彩とは呼ぶもののベトナム産ではなく、中国の明時代の後半(一六世紀)福建または広東省付近の地方窯で焼かれたものと思われる。恐らく阿蘇氏配下の和寇か、博多商人等の手によって運ばれたものであろう。これらの焼物類は、学問的価値がきわめて高いとして昭和六十一年六月重要文化財として国の指定を受けた。

このように「浜の館」は、この地方の伝承のなかに数百年前の史実を秘めて生きていたのである。